
とあるメディックの迷宮

朋斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるメディックの迷宮

【Nコード】

N3986F

【作者名】

朋斗

【あらすじ】

世界樹のあるとある公国で母を亡くし失意のメディックは、酒場の角で異国の剣士と出会う。古めかしい言葉を使う剣士と話している内に彼は…（メディックのシッコミ日記）

第0話（前書き）

ゲーム世界樹の迷宮2の二次創作です。

ストーリーと異なる点やキャラが設定と大きくかけ離れている場合もあるかと思いますが、ご容赦下さい。

なにぶん未熟者ゆえ、誤字脱字を見つけたら、そつとお知らせ下さい。

第0話

世界樹

天を突き抜け、地の底まで根を下ろしていると言われる巨大な樹

それは、まるで遠き昔に亡びた世界の墓標にも見え

また、命を育む生命の苗床にも感ぜられた。

冒険者達はその樹に魅せられ、己が命すらかけてその内部に足を踏み入れるのと同様にこの公国で育った俺もまた、世界樹に魅せられていた。

子供の頃は、冒険者だった父に何度も冒険の話が強請り、自分もいつの日か、父と共に冒険することを夢に見ていた。

『草を掻き分けて進んだ先に何があると思う？』
それが父の口癖だった。

その先を決して父は教えてくれなかったが、俺は強いモンスターだったり財宝だったり色んな空想をして楽しんだ。

だが、子供の俺の夢は長くは続かなかった。

父が世界樹の迷宮の中で姿を消し、何カ月後かに冒険者達が血の付いた母の手作りのお守りを持ち帰った事により、俺の夢は現実に打ちのめられた。

そう、命を懸けて冒険するといった『命』という現実が子供の俺には重すぎて、好きだった父の死は俺を夢から覚ました。

貧しかった我が家は、父という働き手を失い、母は夜遅くまで酒場

で働き、俺も近所の同い年の子供と遊ぶ機会も無くなった。

その頃からか、俺は父が作ってくれた玩具の木刀を倉庫の奥にしまい込んで、忙しい合間をぬっては今まで手を付けなかったような本を読むようになった。

父のような剣士ではなく、医術を学びだした。

母を楽ししようと昼は身を粉にして働き、夜に必死に勉強した。

その甲斐あってか医術が人並みに使えるようになり、薬泉院に就職が決まったその日、数日前から床に臥していた母が息を引き取った。

過労だった。

失意で目の前が真っ白になった俺は、薬泉院を辞め、街を徘徊した。もう、どこに行くのか、何がしたいのか分からない闇雲に街を歩き回る。

そんな日が何日も続いたある日の事だった。

いつものようにフラフラと酒場の角にさしかかった俺の目に歪な文字が飛び込んできた。

『よついでん もとむ さつきゆうに』

下手なのか達筆なのか分からない様な字で書いた張り紙に出会った。単語を繋げただけの意味の分からない張り紙に俺は脚を止める、何かを気に止めるなど、何日かぶりだった。

『ぎるど 叢生』

よくよく見ると下のほうに異国の言葉でギルド名があった。

冒険者ギルドの事だろうと推測できるが、この張り紙は異国の人間が書いたのだろうか？

どうでもいいが、これでは仲間が集まらないだろう。

間抜けなギルドもあったもんだ。

「…くっ！」

何故だか分からないが、自然に笑いが込み上げてきた。

「人の書いた広告を見て笑うとは、失礼な奴もいたものだ」

唐突に背後から声が背中に刺さった。

低い女の声に振り向くと、異国の女剣士が仁王立ちで立っていた。

長い漆黒の髪と上半身はさらに以外に身に着けていない、顔はそれなりに美人なのだから、目のやり場に困る。

視線をそらしつつ、俺は張り紙を指差した。

「これ、お前が？」

と聞くと

「左様、それは拙者が書いた」

女剣士は鷹揚に頷いた。

「言葉は学んだが、文字は単純なものしか書けぬのだ」

美人の口から出たとは思えない古臭い言い回しに思わず面食らう、一体何処で言葉を学んだのやら…

「んなの、ギルドに字が書ける奴はいねーのか？」

「私の他にヨモツネがいたのだが、面倒だと辞退したのだ」

「だからって…って、待て！お前のギルドには、二人しか居ないのか！？」

「だから『早急に』と書いておるだろう」

女剣士は胸を張って言う。

「それにこの張り紙を見て二人ほど、ギルドに入っただから今現在二人ではないぞ」

「来たのか？この張り紙でっ！？」

しかも二人も！？」

どんな物好きだ、ソレは

「お前を入れると三人になるな」

「待て！俺は入るとは言っていないぞ！！」

「何だ、違うのか？」

「違うに決まってる、俺は…」

冒険者になるつもりはない、と言いかけて、俺は言葉を飲み込んだ。
「どうした？」

俺は…？

俺は何になるつもりだ？

折角の就職も医術も道も何もかもどうでも良くなって
意味もなく街を歩いて

俺は何をしたいのだ、何を求めている？

「どうして、だ？」

「は？」

気が付けば、俺は女剣士に質問していた。

「何故、お前は世界樹に臨む、死ぬかもしれないし、もし成功してもほんの一握りの者達だ。幻想を追いかけて何になる？」

何故、こんな事を口走っているか分からないまま、俺は首を傾げた
女剣士を睨んだ。

「む、私にはお前の言いたい事が分からぬが？」

「お前は、世界樹に何を求めている？」

「何も」

女剣士は答えた。

「…は？」

「求めてなぞしておらん、世界樹などと大層な名が付いていようとモ樹は樹だ。目の前に野があれば歩き、谷があれば降り、樹があれば登るだけのこと、それが人間の心理であろう」

「人間の、心理？」

「そなたは違うのか？」

前の俺は、違うと言えたかもしれない。

だが、その言葉は荒れていた俺の心にストンと落ちた。

「それだけで、アレに挑むのか？ 酔狂にも程があるだろう」

「む、ならば、そなたは違うと申すか？」

「ああ……」

一生、ならないと決めていたというのに、俺はなんて馬鹿なんだ！

「ちがわねえよ」

女剣士に生理的に流れた涙を拭って、言ってやる。

「お前の所のギルドに回復要員は、いるか？」

「ちょうど欲しいと思っていた所だが、何だ、結局、来るのか？」

「合わなかったら抜けさせてもらうがな」

女剣士は一瞬、ポカンと俺を眺めたが、すぐに破顔して笑った。

女らしくない剣士としての豪快な笑い顔だった。

「そうか、飽きささない事だけは保障しよう、拙者はギルドリーダーのカンナギだ、ようこそ！ ギルド叢生へ！！ 歓迎しよう、メディック」

「ああ、よろしく……」

「他の仲間はギルドにいるから、向こうに着き次第一人ずつ紹介しよう。ああ、我がギルドの決まりもそこで説明する」

そう言っと、カンナギは手を差し出した。

「何だ、ソレ？」

「この国にも握手というものはあるだろう、友好の印だ」

「ああ、成る程」

俺は剣ダコだらけの無骨なカンナギの手を握り、薄く笑った。

あまりにも個性的すぎるメンバーに俺が後悔するはめになるのは、
もう少し先の話

第0話（後書き）

世界樹の迷宮での我が家のパーティの話です。

叢生とは、青々とした雑草が生い茂る様子だそうで、雑草のように根強くしぶとく生きてくれるように…と、育てています。

第1話

神というのは、公平な方らしく、神は高い戦闘能力の代わり、こいつらに一般常識と社会的な性格適性という大切なモノを与えてくれなかったようだ。

本当にコイツらは、そっちの才能があって良かったと思う。

カンナギの話から碌な奴らではないだろうと腹を括っていたが、事実は俺の想像を斜め上をいった。

変人ギルド

いつの間にか、叢生はそんな風に言われていた。
富も名声もいらないギルドなどざらにいるが、冒険の意味を問われた時に『そこに木があったから』などと、到底、理解出来ない理由のギルドは他にはいまい。

せめてと俺は他のギルドになめられない様、伊達眼鏡をかけてみた。
真っ白の洗い立てのような白衣はすっかり草臥れ、所々に何が原因か分からない染みが出来ている。

カンナギに誘われて数週間、俺は完璧に変人ギルドに馴染んでしまった。

皮肉な笑いは元からだ、樹海の邪魔だと茶髪を短く切り、目を眼鏡で隠し、白衣の下にいくつもの防具を着込む。

すっかり冒険者の風体になった。

そして――

今、俺の前にはカンナギの背中があり、俺の隣ではヨモツネが銃を構えている。

ブツブツと聞き取れない様な小声で何か呟いたカースメーカーのシズカが、テンション高くけたたましい笑い声を上げる金髪巻毛ことドクトルマグズのアカツキの背中を突付く。

目前にはモンスターの群れ

「さあ、闘いを始めよう、命と生き様をかけ、禁ぜられた領域へと足を踏み入れる為、我等……」

「前置きが長いんだよっ……」

詠うようなカンナギの口上に俺は叫ぶように突っ込む。

既に戦闘が始まり、各々が武器を構え、モンスター達は俺達を殺さんとばかりに襲い掛かって来ているというのに……

「あつはつはつ、レンレンは短気だねえ、オレは別に気にしないよお？」

アカツキはモンスターの爪を剣で受け流し、赤いドレスをひるがえし、返す手でモグラの身を切り裂いた。

「どおどおっ！ カッコいいでしょー？」

あつはつは、とけたたましい笑い声のカンナギの傍でパチパチとシズカが気の無い拍手を送る。

ガウンと銃声がして、俺に飛び掛らんとしていた森マイマイが吹っ飛んだ。

その隙をカンナギは見逃さなかった。

一気に刃が森マイマイの身を一闪した。

「絶妙な『あしすと』だ、ヨモツネ」

「ん…」

カンナギの呼びかけにヨモツネは小さく頷く。
アシストぐらいまともに言ってくれ！

この程度の敵には手こずらないものの、このギルドは、どうも緊張感が足りない。

クイツと白衣の裾を引っ張られ、俺は視線を下げる。

「…何だ、シズカ？」

おさげのカースメーカー、シズカは無言で手を広げる。
そこにはチョココンと飴玉が乗っている。

「飴…がどうかしたのか？」

「あげる」

明るいポップな包み紙の飴玉を眺め、俺が首を傾げるとシズカもつられてコテンと首を傾げた。

「レンカ、癩癩持ちだから、飴をあげてやれと言った、アカツキが」

「まあたアカツキ、てめえか…」

半眼で睨むが厚顔を地で行くアカツキには露ほど効いていないらしい、ニマニマ笑った、こちらを見ていた。

この程度で怒っては身が持たない事は、このギルドに入隊した初日に分かっていたことなので、俺は深く溜め息をつき、おもむろにアカツキの頭に向かって、杖を振り下ろした。

ゴツと鈍い音とともにアカツキの悲鳴が樹界に響いた。

『第1話 アリアドネの糸を忘れて冒険に行った冒険者の顔って、土色だよー by アカツキ』

ギルド叢生は呼び名をリーダーのカンナギが決めるのが決まりらしい。

どうもヨモツネの奴が名を名乗らず、続くシズ力は名前という存在を知らず、仕方なくカンナギがとりあえずの呼び名を決めたのが始まりで、アカツキがノリでカンナギに名前を決めさせたせいで決まりになったらしい。

最後のはともかく、二人には何らかの事情があるのだろうと深くは突っ込まないことにした。

最後のはともかく…

俺自身、新たな人生を歩むようなものだからと、カンナギに名前を考えてもらった。

「レンカというのはどうだろう、蓮の花をレンカだ、人を治療し命を救うメディックに相応しかろう?」

とのこと

女のような名前だと思ったが花の名とは、何となく気恥ずかしいよな、何とも言えない気持ちになったが…

とりあえず、ヨモツネの名前よりはマシだろうと思うことにした。

それはともかく、あの看板を見て来ただけあって、変人揃いのメンバーに俺の精神的な疲労は溜まるばかり、特にドクトルマグズのアカツキは、天敵と言って良い。

神の神託を受ける巫族のはずなのに、何なんだ、あのハイテンションはっ！

「痛いなー、傷を治すメデックの癖に暴力に訴えるなんて、樹界で倒れたらレンレンのせいだぞっ！」

「テメエがこの程度で死ぬようなタマかつ！それに安心しろ、それで倒れたとしても治療してもう一度ぶつから」

「うつわー、聞いてよ、カンナギっち、この鬼畜があー!!」

「見ていたが、どう見てもお前が怒らせねば、レンカはぶたないと思うが？」

アカツキはカンナギに抱きついて、助けを求めたようだが、カンナギは一言で切り捨てた。

流石だ、リーダー

「だが、喧嘩如きでお前のMPやアカツキの体力を減らし、樹界の探索が成りゆかなくなるのも馬鹿馬鹿しい、殴るなら終わってからにしてくれ、レンカ」

「了承した、リーダー」

「酷っ！！ちよっと、シズちゃんやツネツネも何か言ってよ！」

アカツキはカンナギを諦め、後衛無口コンビ（と俺は呼んでいる）に訴える。

「アカツキ、シズカを騙してた」

シズカも抱きつこうとするアカツキを避けると一言で切り捨てた。

フードの下表情は変わってないが、言葉から察するに騙されていたと知って少し機嫌を損ねたらしい。

「騙したわけじゃないよ、レンカが癩癩持ちなのは本当だもんねえ？」

「まだ殴られたりないのか、アカツキ？」

「まあたそうやって暴力で解決しようとするんだから、暴力メディックが！」

「喧しい、騒音巫女」

アカツキが再度、俺に言い返そうと口を開けた瞬間、ガウンと一際大きい銃声が樹界に鳴り響いた。

バサバサと銃声に驚いた鳥達の飛んでいく羽音が聞こえ、俺とアカツキは喧嘩を止めて、この銃声の主たる仲間の一人を見た。

いつの間にか、傍の切り株に座って本を開いていたヨモツネが空に向けて銃を放ったらしい。

「な、何？」

これには、流石のアカツキも吃驚したようで、オドオドとヨモツネ

を見た。

つてか、俺も驚いた。

「威嚇射撃、モンスターの足止めと喧嘩の仲裁に有効」

それだけ言つて、ヨモツネは再度、本を読み始めた。

その隣で腰を下ろしたシズ力は「おみごと」と呟きながらパチパチとやる気のない拍手を送る。

「ほほう、ガンナーは便利なスキルがあるな、私にも一つそういつた類の技があれば良いのだがな」

感心したようにカンナギが首を捻る。

小さく「首打ちを…」とか聞こえた日には、カンナギにその「便利なスキル」とやらがないうことに感謝した。

あの馬鹿力で戦えば首打ちが例えみね打ちだろうと首が飛ぶ。

どうでもいいが、俺達はモンスターと同等の扱いなのかよ。

複雑な思いでアカツキと顔を見合わせた。

「ちえ、レンレンのせいでツネツネにまで怒られたしい」

口を尖らせたアカツキに微かな殺意を覚えながらも、再度の「威嚇射撃」が発動する前に俺は杖を握りしめ、奴を黙らせておいた。

本日、二回目の鈍い音は、森の奥まで響いたという。

第1話（後書き）

大分遅れてしまいました…。

取りあえず、初期メンバー紹介

最下層アカツキは可愛いと思うのですが、メディックさんには気に食わないらしいです。

ツッコミのはずがDVに…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3986f/>

とあるメディックの迷宮

2010年10月11日19時59分発行